

— 血に染まった修羅の瞳と、
神をも殺す戦鬼の横顔 —

新連載 01

DEUSLAYER

デビュー作

『神戯』

で話題沸騰!

Illustration = 遠田志帆

著 = 神世希
shinseiki

神世希——shinseiki

東京都在住の自宅警備員。『神戯—DEBUG PROGRAM—Operation Phantom Proof』（発売中）にて第2回講談社BOX新人賞 Powers を受賞、デビュー。

遠田志帆——Enta Shino

秋田県出身、埼玉県在住のイラストレーター。綾辻行人『Another』（角川書店）や新書館『ガールズラブアンソロジーひらり、』の表紙などを務める。最新作『羽州ものがたり』（菅野雪虫）が角川書店より1月28日に発売。

「techicoo」

ハンドル上に表示されている電子地図、ネットナビゲーションシステム上の時計は、午後七時一分を示していた。もう絶望的。このままナビ通りの道順を通って行ったのでは、確実に配達時刻に間に合わない。オマケにこんな時に限って渋滞に捕まってしまう。ナビがネットからダウンロードした最新情報によると、つい先ほどこの先の道路が通行止めになったらしい。詳細は不明だが、事故か何かでも起きたのだろう。なんとハタ迷惑な。いや、迷惑さの度合いで言えば、さっきの不良どもの方が最悪だった。見たところ中学生くらいと思しき買い物袋を下げた女の子を、数人で取り囲んでの強引なナンパ。怯えていた女の子は一言も口を利けず、それをいいことになおもシツコク言い寄るその様を見せられては、デリバリーバイト中だった俺もそのまま素通りというワケにもいかず。電動二輪バイクに跨っていた手前ちよっと強気にもなっていたのだろう。気分はなんちゃって正義の味方、特撮ヒーロー気取りでその娘の前に割って入り、彼女をその場から逃がして不良どもを引っ掻き廻していたら、あれよあれよという間に時間は過ぎて行き—— 現在ダメ押しの渋滞で、定刻でのお届けは最早不可能といった状況なのだった。

「もう諦めるしかないか……」

この道路みちが通行止めとあつては、どう足掻いても間に合わない。せめてこの先、交差点のところまででも通れればなんとかなるのだが——

そんな不満を募らせつつ、車載のナビが表示する電子地図と睨めっこしている……ピコーン！☆と灯る頭の豆電球、ふと閃き冴え渡る名案。

この先の通行止めをちよいと迂回して、先の交差点まで行くことはできないだろうか。車

では通行不可能かもしれないが、こっちは手軽さが売りの小回りが利く二輪車だ。道路の状況にもよるだろうが、もし通れるようなら、配達時刻までにお届け先に着けるかもしれない。そうと決まれば、思い立ったが吉日。善は急げ。善か微妙だけど、ココはお客様第一で、多少の無理には目を瞑るべし。

俺は道を塞ぐ糞詰まりのような車列を抜けると、一人で狭い横の細道へと入る。車体幅ギリギリのビルとビルの谷間だ。その、地元住民しか知らない、地図上にも載ってない裏路地を通り、俺は官憲の塞ぐ道路を迂回してその先へと回り込んだ。何も悪さをしようというワケじゃない。もし通れるようならちよいと道を横断させてください、というだけだ。

「何だこれ……」

そうして回り込んだ道の先。一度バイクから降りて様子を窺う交差点。通行止めというくらいだからさぞ凄惨な事故でも起きたのだろう、と思っていたそこには、

「フツーに通れンじゃん」

予想に反して何もなかった。

無人。

道路が通行止めになって、その中にいたヒトたちも外へ締め出されたのだろう。公園の一部に隣接したその交差点は、いつもの喧騒がまるでウソのように静かだった。

では何故ココが通行止めになっていたのか——そんな疑問がスグ頭の中に湧いて出たが、まあ、とりあえずは結果オーライ。道路はフツーに通れるようなので、ココは遠慮なく通らせて戴きマシヨウ。

一旦止めていた電動二輪のモーターを再び動かし、車など一台もないので信号など無視ムシ。俺は我が物顔で交差点に乗り込むと、そのとき横から何かの気配を感じ――

グハッ
衝撃！

横殴りにされて吹き飛ぶ身体。揺れる意識。回転する視界。俺は道路の上に投げ出されて、路上を数回転がされた。

「うっ、痛っ――」

痛みで呻き声が漏れたが、ダメージはそれほど酷くない。スピードを出していなかったのが幸いした。多少手足を擦り剥いたくらいで、骨折などはしていないだろう。

とりあえず顔だけ上げてみると、先の方に転倒した電動二輪が見えた。当然ながら破損している。何が起きたのかよく分からなかったが、俺はやっちゃったと顔を顰めた。これじゃバイト代はパーだ。

横から何かの衝撃を受けた。それで俺は電動二輪から投げ出されて転倒した。

現状で分かっていることはそれだけだが、それだけ分かっていたら十分。ココは赤信号で飛び出した俺が悪いのだろうか、いったいドコのどいつ人が俺のコトを吹き飛ばしやがったのか。

上体を起こして衝撃が襲って来た方を見る。時刻は午後七時を過ぎており、日は完全に落ちていた。空は夜の帳が覆い、星の輝きと月の光だけが夜景を描き出している。そしてその月光を遮るように、地面に横たわる俺に影を落とす、誰かの後ろ姿があった。

その指先から雫が一滴――ポタリと路上に滲みを作る。

影の右腕から滴るそれは、溢れんばかりの血汐。
後ろ姿のシルエットは、傷付きながらも何かに刃向かうよう、視線の先に立ちはだかつて
いる——

「消えろ。目障りだ」

僅か——一瞬だけ振り向けられた横顔。

頭部に鬼神のような装飾を被り、その素顔を隠した誰か。

放たれた言葉は鏃のように鋭く。

ただ、その鬼神は一部が砕け——血に染まった修羅の瞳と、そこに神をも殺す戦鬼の
横顔が覗いた。

「——波ッ！」

ナンか今、死ぬかと思って目が覚めた。

全身を襲う悪寒、水を被ったようにかいた寝汗。乱れた呼吸、激しい動悸——何か恐怖
の対象に追い詰められ、喰い殺されて絶命した瞬間、それが壮絶な悪夢だったと気付かされ
た。そんな感じ。

俺は一つ、息を吹き返すように深呼吸をする。

目覚めた朝は見慣れた背景。いつもと何ら変わらない自分の部屋。ベッドの上。ココは年
季の入った学生寮の一室。

「そうだよな、脅かすなよ——」

カーテンの隙間から差し込む朝陽に目を細め、俺は痛キングと脳天に突き刺さるような頭痛を覚えた。

本日の寝覚めはすこぶる悪い。

諭えるならば、身も竦むような悪夢にうなされて飛び起きたような感じ。しかしその肝心の悪夢の内容を、俺はサッパリ覚えていなかった。——いや、それ以前に、昨夜の出来事を何一つ思い出せない。……はて？俺は昨日いつたい何時に寮に帰って来て、いつたい何時に寝たのだろうか。そこからして何一つ思い出せない。昨夜の出来事が頭の中から綺麗サッパリ抜け落ちていて、それでも何か思い出そうとすると、眉間をアイスピックで突き刺されるような痛みが走り抜ける。

ただ一つ——血に染まった修羅の瞳と、戦鬼のような横力才顔を除いて……
 「頭を抱えて悶える俺」

だから何かこう、対処しようのないモヤモヤした感じが、頭のソコに残っていてムカムカする。熟睡している最中に目覚まし時計で無理矢理叩き起こされるのといい勝負だ。

「——ってコトで、いま何時？」

そう。だから今朝は目覚まし時計に叩き起こされなかった俺は、ベッドの横の机の上の本棚の上に置いてある（手近なところがあるとスグ止めてしまうからね）目覚まし時計を見る。時刻はその時間に部屋を出ないと限りなく遅刻確定になるという午前八時に迫りそうな午前七時五十分只今三三秒。

「——マヂかよ」

ヤバイじゃんチコクじゃんギリギリじゃん間に合わないじゃん。朝ごはん食べる時間無い

じゃん！

その遅刻寸前ギリギリの現実に直面した瞬間、目覚めの不快さなどあつと言う間に青空彼方、頭痛などキラツ☆と綺羅星になって飛んで行った。俺は、いざ鎌倉とでも叫びそうな勢いで飛び起き、一分三〇秒の早着替えのち食パンを啜えようと、制服のネクタイも結びかけのまま寮の部屋を飛び出した。

二二世紀を迎えた今日の日本は、少子化ココに極まれり、といった時代になっていた。次々と統廃合を繰り返していた教育機関は、今や関東地区では太平洋上に浮かぶ人工の島、この海上新都に一つを残すのみ。旧時代に使っていた小学校・中学校・高校・大学なんて区分は無くなり、修学年数は皆一律に一二年。それから先は研究者になるか就職するか、はたまた自由なプー太郎になって世の中を漂うか、の三択。研究者だけは成績によってふるいが掛けられるが、職は選ばなければ基本あぶれることはない。かつては就職氷河期なんて時代もあったらしいが、今や仕事は適性試験だけでそのまま就けるエスカレーター式だった。なんせ人口自体が少ないのだから。

俺はそんな国立関東大学園の高等部一年生。十歳のときに交通事故で両親を亡くしたミナシゴ苦学生で、初等部に在籍していたときは施設から通っていた。今はその施設も卒業して、学園の寮で一人暮らしをマンキツ中。そしてただ今アホみたいにだだっ広い学園の敷地内を、寮から教室目指してマラソン中。食パンを啜えながら（途中の自販機で豆乳サイダーを購入）約三キロ弱の距離を十分そこそこで走り抜き、上履きに履き替える間もなく裸足で（靴下を穿く時間がなかったの）廊下を駆けてく愉快なフジワラさん（俺のこと）は、チャイムと同時に教室に飛び込んだ。

ご購入はこちらから

こちらは、試し読みです。続きは、こちらで購入できます。

■講談社BOX編集部が手がける電子雑誌「BOX-AiR」創刊！

「BOX-AiR」は、西尾維新氏の「化物語」シリーズなどで知られる講談社BOXと、各界の著名なクリエイターが個人として集まり作り上げられた電子書籍「AiR」、そして「新世紀エヴァンゲリオン」など多数のヒット作を手がけるスターチャイルドが、新しい才能発掘を目指して創刊した電子雑誌です。

＜アニメ化作品を発掘！！「BOX-AiR」の特徴＞

新しい才能の発掘と育成を目的としている点は従来の文芸雑誌と変わりありませんが、最大の特徴は掲載原稿の募集を公式サイトで行い、ひと月単位で選考を行った上で、掲載される点。

また、毎号スターチャイルド制作グループを交えて掲載作品のアニメーション化が検討され、連載が単行本1冊分掲載された作品については、講談社BOXから紙の書籍として単行本化されます。

BOX-AiR零号/講談社BOX-AiR

価格：350円

パプー版（パソコン・PDF・ePub）：<http://p.booklog.jp/book/18527>

iPhone・iPadアプリ版：<http://itunes.apple.com/jp/app/id415281243?mt=8>